

その一方、大阪で増えたことばがある。「それ、なんぼ?」「なんぼ儲かるんや?」となんでもかんでも、金を意識した価値観で行動するようになった。それで変になった。もうひとつある。「ええんちゃう?」だ。「そんなんで、ええんちゃう?」「そんなん、やらんでもええんちゃう?」。この「ええんちゃう」が異なることを受け入れて新たなことをつくり出す大阪のダイナミズムを弱めた。

ことばをいい加減にしたら、あかん。もうそろそろ、「それ、なんぼ?」「ええんちゃう?」をやめて、大阪文化そのものの「なんでや?」「ほんまか?」「要はこういうこっちゃん」が飛び交う大阪のまちに戻そう。

いけなが・ひろあき | 1959年大阪市生まれ。1982年大阪ガス入社。人事・営業・企画を経てエネルギー・文化研究所長ののち現職。大阪の風土と文化や社会経済構造などの研究、日経COMEMOなどで情報発信中。近著に、「日本再起動」(関西学院大学出版会)など。



東西での対話で気になることばがある。東京で話していると「~だよね」と言われることが多い。「私もいいと思っていた」という意味の「~だよね」で、共感の安心が込められているように感じる。一方、大阪人は相手に対して、「~とちゃうか」と問いかける。自分の考えを確認するため、「それって、~とちゃうか」と相手にぶつけて議論し、対話を通して信念にしていく。議論のなかで自分の考え方が違っていることがわかったら、「なるほどなも」と前言を翻す。「~だよね」の東京と「~ちゃうの」の大阪。人の心を巧みにつかみ、深く対話を行い、物事の本質を捉えようとする大阪人。

そんな大阪から、減りつつある大切なことばがある。「なんでや?」「ほんまか?」「要はこういうこっちゃん」だ。「なんでや?」でその背景を知り、「ほんまか?」で真偽を確かめ、「要はこういうこっちゃん」で本質をつかむ。これこそ大阪人の対話力だった。大阪の強みそのものだった。

COLUMN 01

私たちが失いつつある  
大阪ことば

文 | 池永寛明 (大阪ガス エネルギー・文化研究所顧問)